

入試が変わる今 /

代を生き抜くには？

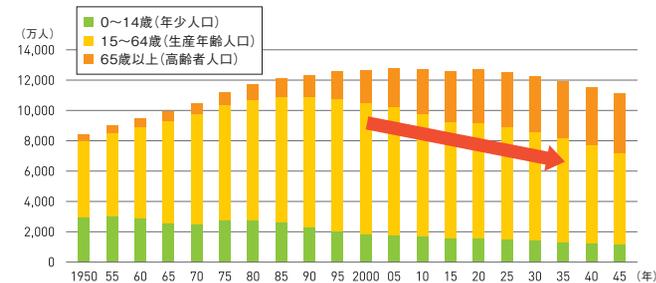
代わって「大学入学共通テスト」がスタートします。からに他なりません。こうした時代に立ち向かうわが子を入試がなぜ、どのように変わるのか、いるのかを知っておきましょう。



わが子が生きるのはこんな時代

労働者人口が減少

人口に占める生産年齢人口の割合は、2000年の68.1%から2035年には56.4%に



内閣府「高齢社会白書」(平成30年版)「高齢化の推移と将来推計」より

技術革新が加速

アメリカの小学校に入学した子どもたちの**65%**は、大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろう

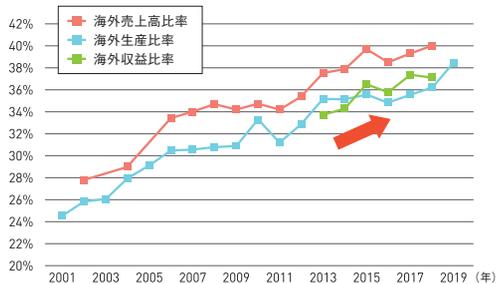
(キャシー・デビットソン教授：ニューヨーク市立大学大学院センター)

今後10～20年で**47%**の仕事が自動化される可能性が高い

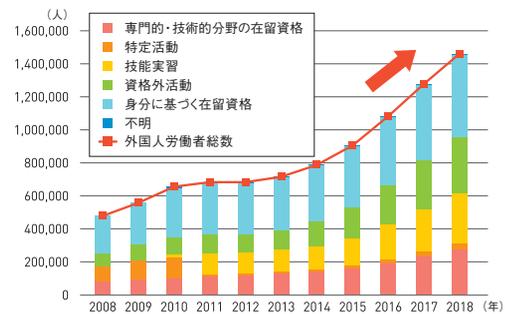
(マイケル・A・オズボーン准教授：英オックスフォード大学)

グローバル化の波

日本企業の海外生産・販売比率は右肩上がり。同僚や上司が外国人が珍しくない時代に



株式会社国際協力銀行「わが国製造業企業の海外事業展開に関する調査報告(2018年度)」の「海外売上高比率、海外生産比率、海外収益比率」より



厚生労働省「外国人雇用状況」の届出状況まとめ(平成30年)「在留資格別 外国人労働者数の推移」より

これからの世の中で必要な力を育み問うために入試が変わる

「入試が変わる」と聞くと、「わが子の時代になぜ？」と不安が先立つてしまうかもしれません。しかし、保護者の方々が大学受験をしたり社会に出たころと今とでは、世の中が大きく変わってきていることは普通の生活からも実感されていると思います。昔はなかった業種の会社や職種が増えていたり、企業に海外資本や外国人経営者が入ることは珍しくなくなっています。AIやIoT(物のインターネット)が私たちの生活に溶け込んでおり、大学の願書提出もネットで行うのが普通の時代です。技術革新は加速的に進むと考えられ、それによって現在ある職種の約半数がAIなどにより自動化されていくと予測されています。単純労働の職種は、遠くない将来に人間の仕事ではなくなる日が来るかもしれません。また、少子高齢化は歯止めがかからず、労働力人口が減少し、より生産性の高い働き方が求められるようになります。現在でもあらゆる業種で労働力不足が深刻になっていますが、それを補うために、外国人の方が働く風景が日常になってきています。日本国内に外国人が増えることも

2020年 大学 わが子が新しい時

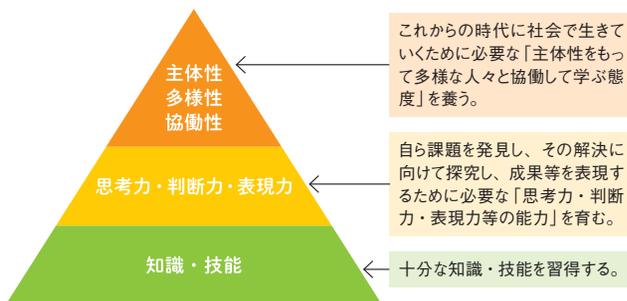


2020年度に、現在の「大学入試センター試験」に入試が変わる理由は、世の中全体が大きく変わっている
保護者はどう支援していったらよいのでしょうか？
そのために、学校現場はどうなって

だから学校でつける力も
変わってきている！

社会で求められる力が変わってきている！

新しい学力の3要素



学力の3要素を入試でどう評価するか

図 入試における学力の3要素の評価ポイントの変化

学力の3要素	知識 技能	思考力 判断力 表現力	主体性 多様性 協働性
共通テスト	センター試験	2020年度からの「大学入学共通テスト」	
大学個別の 選抜試験	今までの大学個別の選抜試験		

ロボットやAIには代替できない 人間ならではの力

創造的な思考

- 抽象的な概念を整理・創出することが求められる（例：芸術、歴史学・考古学、哲学・神学など）
- コンテキストを理解したうえで、自らの目的意識に沿って、方向性や解を提示する能力

ソーシャル・インテリジェンス

- 理解・説得・交渉といった高度なコミュニケーションをしたり、サービス志向性のある対応が求められる
 - 自分と異なる他者とコラボレーションできる能力
- ※ソーシャル・インテリジェンス（社会的知性）=コミュニケーションや協調性などの能力

非定型

- 役割が体系化されておらず、多種多様な状況に対応することが求められる
- 予め用意されたマニュアルなどではなく、自分自身で何が適切であるか判断できる能力

野村総合研究所「知的資産創造」2018年7月号より

に、日本企業の海外進出もさらに
続伸することが予想され、日本に
いてもいなくても、グローバル化の
波にもまれていくのが子どもたち
の生きる時代なのです。

昔とは異なる時代を生き抜くた
めに、世の中で求められている力が
変わってきています。文部科学省
で審議されてきた「高大接続改
革」と呼ばれる教育改革では、今
まで重視されてきた「知識・技能」
に加え、「思考力・判断力・表現力」
を身につけ、「主体性をもって多様
な人々と多様な場面で協働する」
力が求められています。それが「新
しい学力の3要素」です。これら
を身につけるために、高校教育、
大学教育が変わろうとしており、
その力を問おうとしているのが新
しい入試なのです。高校、大学、
入試の3つが三位一体となって変わる
「高大接続改革」が始まっています。

2020年度から「大学入試セ
ンター試験（以下センター試験）」が
「大学入学共通テスト」に代わり
ますが、私立大学や国公立の二次
試験など大学個別の入試も既に
変わり始めています。

入試がどのように変わり、学校
現場はどう変わっているのか、今の
時代に求められる力をつけるため
に保護者や家庭でできることは何
かを見ていくことにしましょう。

PART 1

新しい学力を問う 大学入学者選抜

大学入試は大きく分けて、センター試験に代わって始まる「大学入学共通テスト」と、大学個別のテストがあります。現在でもそれぞれの役割がありますが、新しい学力を問うために何がどのように変わるのか、具体的に見ていきましょう。

高校と大学の教育をつなぐ 「大学入学共通テスト」へ

これからの時代に求められる力が、2020年度から導入される「大学入学共通テスト」でどのように問われようとしているのでしょうか。大学入試センターでその実施に向けた検討に取り組まれている大杉住子さんに、新しいテストはどんなならいどのような問題になるのか、センター試験と何が違うのかについて解説していただきました。

知識の質や、思考のプロセスに光を当てた設問

高校生や保護者の皆さんには「センター試験が変わる」という入試の変化だけがクローズアップされがちです。しかし、現在の教育改革の本質は、入試を乗り越える力ではなく、社会に出てから生涯にわたって必要とされる力を、高校・大学を通じて子どもたちに身につけさせようというものです。もっと言えば、新しい学習指導要領では幼稚園から大学まで、学校種を超えた積み重ねでこうした力をつけていこうとしています。

そのため、高校の現場では学力の3要素(前ページ参照)を身につけるために「主体的、対話的で深い学び」を目指す授業に変わってきています。こうした高校での授業や学習の成果を最大限に評価して

大学での学びにつなげようとしているのが、新しい「大学入学共通テスト」(以下新テスト)なのです。センター試験と同様に大学の教員が作問しますが、新テストでは高校と大学の教員が教科ごとに大学の基礎力としてどういう力が求められるのかを議論し、それをもとに作問されることになりました。

具体的には左図「センター試験からの主な変更点」で示したように、国語と数学にマークシートだけでなく記述式問題が出題されたり、英語では従来の「聞く」「読む」に加えて、「話す」「書く」を含めた4技能が重視されます。マークシートで解答する設問でも、知識の質や思考の過程を重視した問題を取り入れます。

新テスト導入に先駆け一昨年と昨年に、高校生を対象として試行調査(プレテスト)を実施しまし



独立行政法人
大学入試センター
審議役
大杉住子さん

1997年文部省(現・文部科学省)入省。幼児教育、大学教育、キャリア教育など教育制度を中心に担当。2014年から文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室長として学習指導要領改訂を担当。2017年4月より現職。

た。大学入試センターのホームページで試行調査の全問と解答を見ることができですが、見ていただきたいのは設問自体よりも「問題のねらい、主に問いたい資質・能力」です。各教科でどういう思考が問われているかを具体的に明らかにしています。受験のためだけに知

試行調査から見てきた

新テスト・ 3つの変化ポイント

大杉さんのお話にある「知識の質や思考の過程を重視した問題」とは具体的にどのような設問になるのか、2018年11月に実施された試行調査から読み解きます。

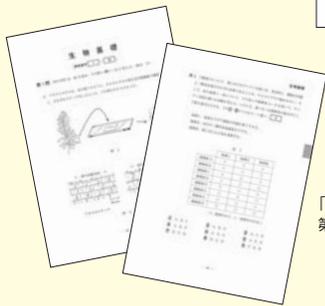
※独立行政法人大学入試センター「大学入学共通テスト」試行調査(平成30年11月実施分)より抜粋

答えの結果のみではなく、
解決のプロセスが問われる

数学の図形の証明問題で、問題解決の結果だけではなく、解決に向けた構想の過程を考えたり、生物で実験結果から実験方法を考える設問が出題。場面や文脈が異なっても解決方法を導き出せる応用力が問われます。



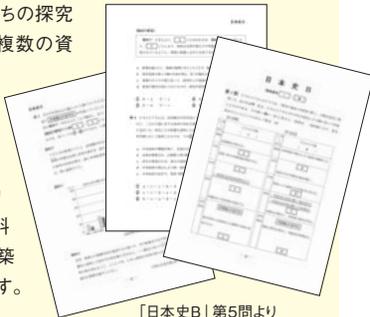
「数学I・数学A」
第1問[4]より



「生物基礎」
第1問・問3より

国語だけでなく全教科で、
より情報を読み解く力が必要に

日本史では、ある生徒たちの探究授業の過程から出題。複数の資料をもとに考察し論述していく流れが設問となっています。このように国語以外の教科でも文章や資料を読み解く力が求められ、複数の資料から情報の意味を再構築する力を見ようとしています。



「日本史B」第5問より

実際の学習や生活の場面で
想定した問題も

日常生活の場面で見聞きしている身近なことがらに対して、教科ごとの視点で説明したり、解決策を探る設問が多数出題されています。例えば数学では小学校と高校の階段の高さから三角比を考える問題や、化学で出汁の成分を化学式で問う設問があります。



「数学I・数学A」
第1問[3]より

※「大学入学共通テスト」試行調査(平成30年度実施)の全問と解答、問題のねらいは以下で見ることができます。
https://www.dnc.ac.jp/daigakunyugakukibousyagakuryokuyhoka_test/pre-test_h30_1111.html

☒ センター試験からの主な変更点

＼ 現行 /

大学入試センター試験

全教科
×
マークシート方式



＼ 2020年度以降 /

大学入学共通テスト

1 記述式問題の導入

【国語】 3問程度(80~120字)
〈試験時間〉80分 → 100分

【数学】 3問程度(数式、方略など)
〈試験時間〉60分 → 70分

※2024年度以降は、【地歴】【公民】【理科】にも導入検討

2 マーク式問題の工夫・改善

択一型に加え、該当するものをすべて選ぶ、複数選ぶなどの方式も

3 英語の4技能評価(外部試験の活用など)

4技能:「聞く」「読む」「話す」「書く」

各大学の判断で 共通テストと外部試験のいずれか、又は双方を選択利用(〜2023年度)

識を詰め込むのではなく、教科で学んだことを使って、ものごとの見方・考え方をどう鍛えていくことが大学教育の基礎として期待されているかがわかると思います。

先の見えない時代への不安を乗り越える教育改革

「モノからコトへ」と消費者の志向が変化するなか、日本経済を牽引してきたさまざまな産業も変化を余儀なくされています。子どもたちに目を向ければ、人気職種にユーザーが挙げられる時代です。こうした社会の変化の中で子どもたちにどういう力をつけてあげたら

いいのかは、保護者の皆さんだけでなく、世の中の多くの大人が不安に感じていることです。それを解決しようとして、教育関係者のみならずさまざまな専門の有識者が時間をかけて議論してきた英知の結集が新学習指導要領であり、新テストです。

「この時代に何をどう学べばいいか」を探りながら、教科ごとの問いに落とし込んでいった想いが、新テストの「問題のねらい」に込められています。

未来の創り手となる子どもたちの幸せを願うのは、今回の改革に関わるすべての関係者に共通した想いです。

求める力を多面的に問う 各大学の個別入試

「大学入学共通テスト」では、子どもたちの「思考力・判断力・表現力」を問う設問が増えています。一方で実施するペーパーテストで評価できることには限界があります。そこで、「主体性・多様性・協働性」は主に大学ごとの個別選抜で問うこととなります。既に変わりつつある大学の個別入試についても、その変化を見てみましょう。



主体性を評価するために 志願書・調査書が重視される

「大学入学共通テスト」が導入されるのは2020年度からですが、大学個別の入試も見直され、一部の大学では既に変化が見られ、メディアでも話題になっています。

これまでの一般入試は「一般選抜」に名称が変わり、筆記試験に加え、「調査書や志願者本人が記載する資料等を積極的に活用する」という方針が示されています。また、AO入試は「総合型選抜」、推薦入試は「学校推薦型選抜」と変更。いずれも、調査書等の出願書類だけでなく、各大学が実践する評価方法、または「大学入学共通テスト」のうち、少なくともいずれか一つの活用が必須化されます(下図参照)。つまり、どの選抜方法でも学力の3要素をしっかりと

り見るというメッセージです。

これに加え、現在の大学では学部ごとに、どんな学生を受け入れるのか(アドミッション・ポリシー)、どんな教育をしようとしているのか(カリキュラム・ポリシー)、大学4年間でどんな力をつけようとしているのか(ディプロマ・ポリシー)という3つのポリシーを策定し公表することとされています。本来、大学選抜は偏差値ではなく、子どもたちの資質に合い、学びたいことで選ぶべきで、その選択がしやすいように変わってきているのです。個別の入学選抜では、各大学のアドミッション・ポリシーに合った生徒か、入学にふさわしい学力の3要素を身につけているかを問おうとしています。

既にこうした入学選抜を始めている大学もあり、主な大学の個別入試の内容を次ページ以降で紹介

介します。特に、「大学入学共通テスト」やペーパーテストでは問いきにくい、「主体性・多様性・協働性」をどのように評価していくかに、各大学の特色が現れています。志願書で高校時代の活動を詳細に求められたり、自分の考えに基づいた論述や口頭試問を行ったり、面接だけでなく集団でのディベートやプレゼンテーションを課している大学もあります。

主体性の評価というと、ボランティア活動や生徒会活動に参加すればいいと考えられがちですが、活動したかどうかだけではなく、そこから何を学びとったか、その経験を今後大学での学びや社会でどう活かしていきたいかという、学びに向かう姿勢も問われています。

保護者の時代と大きく異なる入試に戸惑いを感じるかもしれません。

大学個別入試の主な変更点

現行 /	今後 /
<p>一般入試</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 出題科目が1~2科目に限定 ● 記述式問題の出題なし、評価不十分 ● 英語:「話す」「書く」の評価がない 	<p>一般選抜</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 筆記試験に加え、調査書や志願者本人が記載する資料等の積極的な活用 2 記述式問題の導入・充実 3 英語 4技能評価の導入
<p>AO入試</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 知識・技能の修得状況に過度に重点をおいた選抜としない 	<p>総合型選抜</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 左記記述を削除 2 本人の記載する資料(活動報告書、大学入学希望理由書、学修計画書等)を積極活用
<p>推薦入試</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 原則として学力検査を免除 	<p>学校推薦型選抜</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 各大学が実施する評価方法、または「大学入学共通テスト」の少なくともいずれかを必須 2 推薦書で「学力の3要素」を評価

せん。しかし、昔のように知識の量のみを問われるのではなく、子どもたちがもつさまざまな資質や能力を見ようとしてくれるのです。こうした多面的評価はむしろチャンスが広がったと受け取れるのではないのでしょうか。

既に変わり始めている大学入学者選抜の一例

入学後に必要となる力を多面的に評価できるよう、大きく変わろうとしている大学の個別入試。
いくつかの事例から、大学が入試に込めたメッセージを読み解いてみましょう。

CASE 1

学びの意欲を測る「特色入試」を全学部・全学科で実施

～ 京都大学 ～

基礎学力だけでなく、学びたいという意欲とテーマをもった学生を求めている

京都大学は2016年度から「特色入試」をスタート。高校教育から大学教育への接続を図り、社会の各界で積極的に活動できる人材や世界を牽引するグローバルリーダーを育成するため、高校での学修における行動や成果、および個々の学部の教育を受けるにふさわしい能力ならびに志を総合的に評価する、京都大学独自の選抜方式です。ポスターからもわかるように、学びの「意欲」が求められており、2018年度からは全学部・全学科で実施しています。

こうした入試を導入した背景にあるのは、一般入試と特色入試で入学した多様な学生が切磋琢磨することによって、新しい考えが生まれ出されていくことへの期待です。分野を超えて異なる能力や発想に出会い、対話を楽しみ協力関係を形作る場を提供しようとしています。

詳細は学部・学科によって異なりますが、共通の基本方針は、①高校での学修における行動と成果の判定と、②個々の学部におけるカリキュラムや教育コースへの適合力の判定です。

①では、調査書や推薦書の他、高校での「学業活動報告書」、高校での活動内容から京都大学で何を学びたいのか、卒業後にどういう仕事に就きたいかなど、志願者自らの学ぶ意欲や志について書く「学びの設計書」などの書類を提出。②で、基礎学力や各学部・学科に適合する能力を測るため、センター試験、学部ごとの能力測定考査、論文試験、面接試験、口頭試問等も組み合わせています。



CASE 2

全学部で多面的評価を行い、政治経済学部では数学を必須に

～ 早稲田大学 ～

「主体性・多様性・協働性」をもって学べる姿勢と、学部に必要な学力の双方を求める

早くから入試改革を進めてきたのが早稲田大学です。2018年度からは一部の学部において、地方の優秀な生徒を取り込み、地域社会に貢献できる人材の育成のために「新思考入試(地域連携型)」を導入。高校時代に行ってきた、地域課題に対する活動内容や、早稲田で学びたいこと、将来の地域貢献などについてのレポートで課題発見能力を判定し、論文、センター試験で論理的思考力や学力も判断する入試です。

さらに2021年度の入試では、一般選抜や大学入学共通テスト利用の選抜で、全学部のWeb出願時に、「主体性」「多様性」「協働性」に関する経験について、受験生本人が自分自身の経験を振り返り、文章化することを求めることになりました。得点化はしないものの、記

入がない場合は出願できないことになります。また、政治経済学部で大学入学共通テストの「数学I・数学A」が必須科目となったことで話題を呼びました。

同学部は文系と捉えられてきましたが、実際には統計学や数理的なアプローチが欠かせない学問で、実態に即した入試内容に変わっていくということです。

☒ 早稲田大学個別入試の主な変更点

対象学部等	主な変更点
全学部共通	一般選抜(現行の一般入試)および大学入学共通テスト(現行の大学入試センター試験)を利用した入試の出願要件を変更し、Web出願時に、「主体性」「多様性」「協働性」に関する経験を記入
政治経済学部	一般入試について、大学入学共通テスト、英語外部検定試験、学部独自試験(日英 両言語による長文を読み解いたうえで解答する形式)の合計点による選抜に変更。大学入学共通テストでは、1外国語(英語・独語・仏語のいずれか1つ)、2国語、3数学I・数学A、4選択科目(地理歴史、公民、数学、理科のいずれか1つ)の4科目
国際教養学部	一般入試について、大学入学共通テスト、英語外部検定試験、学部独自試験(英語)の合計点により選抜する方式に変更。大学入学共通テストでは、1国語、2選択科目(地理歴史、数学、理科のいずれか1つ)の2科目
スポーツ科学部	現行の一般入試、センター利用入試[センター+一般方式]に当たるものを、大学入学共通テスト、学部独自試験(小論文)により選抜する方式に変更 ほか

CASE 3

学力の3要素の評価をすべての入試で多様に導入

～ 関西学院大学 ～

ふるい落とす入試から、一人ひとりの生徒をじっくり選抜する入試へ

関西学院大学は2021年度の入試方針として、一般選抜をはじめ、すべての入学試験で学力の3要素を評価する方針を発表しました。「Mastery for Service」というスクールモットーの下、変化の激しい時代に思いやりと高潔さをもって社会変革を起こせる、主体的な学びができる人材を、これまで以上に求めているからです。従来も同学では、入学前に明確な目的をもつ生徒が、入学後に充実した学生生活を送り成果を取めていることから、学びに向かう力を含めた多面的評価を広く取り入れることとしたのです。

学力の3要素の評価の仕方は入試方法や学部によって異なります(図参照)。大学入学共通テスト利用を含む一般選抜入試でも、調査書で学力の3要素を評価することを検討しています。

特に今回の改革で特徴的なのは、総

合選抜入試を全学部で導入することで、学力検査の筆記試験をしない一般入試を秋に実施するイメージで、書類審査や面接審査で時間をかけて選抜を行い、高校での学びの成果をじっくりと評

価を行う入試です。これまでの一般入試で見ることのできなかった学びの成果やプロセスをじっくり手間をかけて評価していく「一人ひとりを見つめる入試」への転換を同学は目指しています。

図 関西学院大学2021年度入試の主な変更点

試験種類		主な変更点
すべての入学試験		<ul style="list-style-type: none"> ● 学力の3要素(「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」)を評価する ● 英語の4技能(「読む」「聞く」「書く」「話す」)を評価する
一般選抜入学試験 (大学入学共通テスト利用含む)		<ul style="list-style-type: none"> ● 学力の3要素については、調査書の記入事項を加点的に評価(具体例: 科学オリンピックなど、学習に関する代表的な取り組みで優秀な成績をおさめた内容を加点対象とする)することを検討しています
新たに導入予定の各種入学試験	総合選抜入試	<ul style="list-style-type: none"> ● 1次選考では、調査書、論述、提出書類等による評価 ● 2次選考では、面接、口頭試問、グループディスカッション等による評価
	探究(課題研究)を評価する公募推薦入試	<ul style="list-style-type: none"> ● 現在実施しているSGH・SSH対象公募推薦に加え、総合的な探究の時間での課題研究を通して成長した生徒を多面的・総合的に評価

CASE 4

面談を通して学びの意欲を引き出す「育成型入試」を導入

～ 九州産業大学 ～

本当に学びたいことを見つけ、自分に適した学部への入学を促す

九州産業大学では2018年度の入試から自己推薦型(AO)入試に「育成型入試」という独自の方式を取り入れました。高校生が出願前に、大学での学びに対する意欲を高め、自分に合った学部学科を探ることができる取り組みとして注目されています。

まず、生徒は出願の希望にかかわらず、6月中旬に同入試のプログラムに登録します。その後、Weekday Campus Visitという同大学が2014年から実施している、普段のキャンパスで、1日大学生になる教育プログラムを受講します。オープンキャンパスとは異なり、大学の

普段の授業を受講するなど、日常を体験できます。受講後は振り返りのレポートを提出。8月下旬に認定資格をもったKSUアドミッションオフィサーと面談を行い、「何に興味があるか」「どんなことを基準に進学先を選んでいるか」などの対話から、本人の想いや考えを引き出し、学部学科のマッチングを図ることが目的です。この時点ではまだ出願前のため、評価する面接ではなく、生徒の意欲を引き出すものです。さらに、面談結果については、KSUアドミッションオフィサーが高校を訪問し、高校教員と共有のうえ進路指導に役立ててもらっている点が大き

な特徴です。「高校と協力して同じ生徒を多角的に理解し、育成の視点で進路づくりを支援する」まさに高大接続型の入試です。2018年度はプログラム登録者の9割近くが同学に出願しています。



KSUアドミッションオフィサーと生徒との面談風景

PART 2

「教わる」から「学ぶ」へ 変わる高校教育



一連の教育改革のなかで実施される、高等学校学習指導要領の改訂。今年度からは「総合的な探究の時間」などが始まり、多くの学校で授業のあり方、学び方に変化が予想されます。具体的に高校での学びがどのように変わるのかを見ていきましょう。

生徒が主体となった
能動的かつ対話的な教育へ

2018年3月に、約10年ぶりに改訂される高等学校学習指導要領が公示されました。この新・学習指導要領は、2019年度より3年間の移行期間を経て、2022年4月(2019年度の中学1年生が高校1年生になる年度)から施行される予定です。

今回の学習指導要領改訂のキーワードとなるのが、「主体的・対話的で深い学び」です。「教わる」から「学ぶ」へ、つまり受動から能動へと、学習指導の軸が大きく転換します。具体的に見ていきましょう。

新・学習指導要領では、これからの予測不可能な時代を生きるうえで必要となる資質・能力として「①知識及び技能、②思考力・判断力・表現力等、③学びに向かう力、人間性等」を3本柱として明示しています。そして、これらの資質・能力を育成するためには「主体的・対話的で深い学び」が求められ、その「実現に向けた授業改善が必要」とされており、近年広がっているのが、「アクティブラーニング型授業」です。生徒が先生に教わる、という受け身の学習ではなく、生徒が主体となった能動的

図 学校の授業はどう変わる?

\ before /

教わる

- 先生が一方向的に教える授業
- ひたすら板書をノートに写す授業
- 生徒の発言や活動が少ない授業
- テスト(受験)のために覚えるだけの授業

\ after /

学ぶ

- 先生の良質な問いにより思考を深める授業
- 能動的に学び、生徒同士が協働して学び合う授業
- 安全・安心で楽しく、知的好奇心を抱きながら探究して学べる授業

かつ生徒同士の対話的な学びが特徴で、これからの授業のベースとも言えるものです。

「探究」が必修化。社会と関わりながら学びを深める

そして、今回の改訂で強調されているのが、「探究」と呼ばれる学びの重要性です。「知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習」が、探究に当たります。近年は「総合的な学習の時間」の中で探究学習に取り組む学校が増えてきましたが、生徒がより自律的

により高度な探究に取り組めるよう、今年度からは「総合的な探究の時間」と名称を変えて、各学校で取り組みが始まります。

また、改訂の基本方針には社会との連携強化も明記されており、「子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を二層確実に育成」するために「『社会に開かれた教育課程』を重視」とあります。具体的には、生徒が地域に出て地域の人々と関わりながら学びを深める授業形態などが想定されます。探究では、このような学びが既に始まっています。次ページでは、「アクティブ・ラーニング」と「探究」について、具体的に解説していきます。



生徒が主体となって能動的に学ぶ

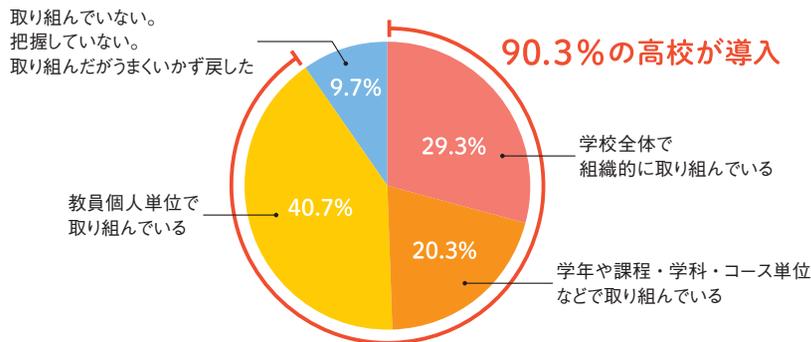
アクティブ・ラーニング

主体的・対話的で深い学びで
教科学力 \uparrow を身につける

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」の動きとして広がっているのが、アクティブラーニング型授業（以下、A L型授業）です。生徒が主体となり、生徒同士が協働してアクティブ（能動的）に学ぶ授業をA L型授業と呼び、決まった型はありません。実践方法も教科によつて、先生や学校によつて、実にさまざまです。

例えば、数学ではグループワークを取り入れ、みんなで考えながら解法を導き出したり、得意な子が苦手な子に教えたりと、学び合いを通して理解を深めていきます。また、英語では社会問題について英語で自分の意見を書いたり発表したり、グループでディスカッションをしたりして、英語力だけでなく思考力や表現力も身につけていきます。A L型授業では、先生の役割は「生徒に教える」ことではなく、「生徒の知的好奇心や学びへの意欲を引き出し、学び合いの場を創出する」ことです。いわば、

図 「主体性・対話的で深い学び」の視点による授業改善への取り組み



リクルート進学総研実施「高校教育改革に関する調査2018」より

対話的な活動を重視しつつ、
知識や技能の習得も意識

「アクティブ・ラーニング」対話的な

学びのファシリテーターなのです。



各教科で学んだことを使って課題解決に取り組む

総合的な探究の時間

自ら課題を見だし、
解決策を探っていく

学力の3要素や主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）は、小学校・中学校・高等学校の新しい学習指導要領に共通しているものです。一方、高等学校の新しい学習指導要領の特色とも言えるのが、「探究」です。

探究では、生徒が自分の興味・関心から自ら課題を発見し、各教科で学んだ知識を結びつけたりフィールドワークをして情報を収集したりしながら解決方法を探っていくます。そして、最終的にはそれを論文にまとめたり発表したりしてアウトプットします。テーマ設定には学校ごとに特色がありますが、地域が抱える課題の発見と解決策の提案など、生徒にとって身近な社会問題を扱うケースが多くなっています。

探究には、唯一無二の正解はありません。変化の激しい時代、予測不可能な世の中で求められるのは、社会課題に対して新たな価値やサービスを創出したり、正解のない問いに対してその時にできるベストソリューションを提案したりという、生み出し発信する力です。そんな力をつけるための学びが、探究なのです。

図 「課題研究」の論文テーマ例（大阪市立大阪ビジネスフロンティア高校）

論文テーマ
町の書店の減少について
音楽は人に貢献している？
マレーシアヤクルトの今までとこれから～日本企業が海外のローカルブランドに勝つには～
百舌鳥駅に快速電車を停車させるには
バター不足と酪農家について
今後の日本映画宣伝のあるべき姿
通販サイトAmazon.comが成功した仕組み
どうすれば待機児童は減るの？そこから見える日本の経済と実態について

学びの活動と成果を記録する
～ポートフォリオ～

高校3年間の自分の
学びの履歴を記録する

作品集のことを「ポートフォリオ」といいますが、「ポートフォリオ＝高校3年間の自分の“学び”を集めたもの」と考えるとわかりやすいでしょう。学校によって違いはありますが、テストの結果や成績表はもとより、探究学習など授業で取り組んだ課題や成果物、部活やボランティアなど課外活動の取り組みなど、学びに関わるあらゆる活動・成果を記録・蓄積（アーカイブ化）していこうという動きが広がっています。

ポートフォリオは大別して紙（ファイルやノートなど）とデジタル（eポートフォリオ）に分けられ、近年は後者を導入する学校も増えています。例えば、聖光学院（神奈川・私立）では、生徒が各自のスマートフォンやパソコンからeポートフォリオに入力できるようになっており、学内外での自主活動についても随時記録を残しています。

ポートフォリオのメリットは、生徒自身が記入・作成することで自分の学習や活動の履歴を振り返ることができ、先生も生徒一人ひとりの学びや成長の変遷を捉えやすくなること。先生と生徒が共有し、面談や進路指導にも活用されています。また、大学入試改革により、学力試験や面接の結果だけでなく高校での活動も含めて評価・判断しようという動きが広がり、出願時に高校3年間の「活動報告書」などの提出を求める大学も出てきています。あらかじめポートフォリオに記録・蓄積しておけば、こうした書類の作成もスムーズです。



甲府南高校（山梨・県立）ではファイル形式のポートフォリオを使用。それぞれの生徒が自分のファイルに課題研究や各種活動を記録していく。



福岡県・明光学園高校の日本史の授業の様子。この日は、「授業の目的と目標を確認」→「問いの提示」→「先生による解説」→「個人・グループワーク」の流れで行われた。



高島高校（東京・都立）の公民の授業の様子。この日のテーマは「ぼくらの政党をつくらう」。グループごとに政党のキャッチフレーズや具体的な政策を考え、最後は各グループ代表が党首演説を行った。

活動」というイメージから、「知識・技能はちゃんと身につくのか？」という疑心をもたれがちですが、AL型授業では先生が生徒に知識や技能を教えるシーンもあります。従来と違うのが、どのタイミングでグループワークなどの活動を取り入れれば効果的か、という視点を先生自身が常にもっていることです。例えば、「先生が教壇に立つて公式Aを教える↓公式Aを使って各自で問題を解いてみる↓グループで解法を確認し、教え合う↓どこでつまずきやすいかを話し合い、発表する」というのもAL型授業です。新・学習指導要領には「知識の理解の質をさらに高め、確かな学力を育成」する」とあり、AL型授業においては知識や技能の習得・定着も強く意識されているのです。



プレゼンテーションやパネル展示など探究活動の発表の形はさまざま。(写真：京都市立堀川高校)



認定NPO法人カタリバが主催する探究型学習プログラム「マイプロジェクト」など全国の高校生とつながる場もある。



地域でのフィールドワークなど、探究では学外で学ぶ機会も多い。(写真：石川県立金沢泉丘高校)

探究関連科目が新設され、評価基準の明確化も進む

現行の学習指導要領では「総合的な学習の時間」のなかで行われることが多かった探究学習ですが、改訂により科目名が「総合的な探究の時間」となり、「理数探究」「地理探究」「古典探究」などの科目も新設されます。総合学習的な側面だ

けでなく、教科学習においても探究による深い学びが求められていることがわかります。

また、探究の成績（評価）については、ペーパーテストなどで知識を測るのではなく、「ルーブリック」という到達度の評価基準を示した表を独自に設定し、それを基に評価する高校が増えています。これにより、生徒も目標設定がしやすくなっています。

PART 3

今日からできる 保護者の支援



入試も勉強も実際にする主役は子どもたちで、保護者は見守り役です。しかし、先輩たちと異なる状況や入試にわが子が戸惑ったとき、保護者にできることはないのでしょうか？過保護にならず、子どもたちの自立支援を促すためにできることを考えてみましょう。

~Message 1~

選択と責任を与えれば、 子どもは自ら学ぶようになる

これからの社会や大学、入試では主体性をはじめとした新しい学力の3要素が求められ、高校現場でもその力をつける授業が始まっています。生徒が主体的に学ぶ「教えない授業」で話題を呼び、「学校に頼らなくても自律型学習者になれる」と著書で語る山本崇雄先生に、子どもが学びの主体性を身につけるために家庭でできることについて語っていただきました。

自ら選択し責任をもつ経験が 自律型学習者を育てる

私は英語教員として、生徒たちが自ら学ぶ方法を選ぶアクティブ・ラーニングで「教えない授業」を実践しています。このような授業を始めたきっかけは、東日本大震災で親や教師を失った子どもたちと触れ合ったときに「大人がいなくても自ら学び続けられる力を、生徒につけてあげなければならぬ」と感じたことでした。

また、学校という場が、社会とかけ離れていることも気がかりでした。社会に出ると仕事の仕方は自分で選び、仲間と共に解決に当たりますが、結果に責任をもたねばなりません。しかし、従来の学校では生徒が何かを選択できる場面はほとんどなく、授業も先生の講義をひたすら一人でノートを取っています。

これらのことから、自ら問い（知りたいこと）を見つけ、学び方を考え、自分なりの答えを見つけていく「自律型学習者」を育てようと考え始めたのです。

そこで、教員依存の授業から、生徒が選択できる授業を始めました。一通りの学び方を経験させた後、例えば英語の音読なら、一人で読みたいか、ペアやグループで読みたいかを生徒たちに選ばせます。このとき留意させるのは、自分の選択で仲間がハッピーになるかどうかです。社会で人と共に働くときと同じ考え方です。選択した結果の責任は自分たちが負うので、生徒は一生懸命考えます。このような複数のタスクから選択することや、人間関係のマネジメント力は社会に出る前に身につけておきたい資質で、新しい学力の3要素にもつながることです。

家庭でも同じで、親が「やれ」と言って勉強のやる気が出ることはありません。スマホを見るのも、勉強するのも自分の選択であり、その結果には責任を取らねばならないことを教えてあげなければなりません。本人も本当はどちらが有益なのかはわかっているはずで



新渡戸文化学園小中学校・高校
英語科教諭
横浜創英中学校・高校
教育アドバイザー
山本崇雄先生

1970年生まれ。公立中学校、都立中高一貫校を経て2019年より現職。学外で「未来教育デザインConfeito」を設立し活動中。著書に『学校に頼らなければ学力は伸びる』など。ご自身も高校生の1児の親。

＼ 家庭で自律型学習者を育む /

8つのポイント

子どもが主体的に学び始める基礎をつくるために、家庭でできるポイントを山本先生に伺いました。

2

習慣を変えるwith

子どもに自主勉強の習慣が身につかないことを思い悩む保護者もいると思います。勉強の時間を生み出す小さな工夫を積み重ねることが効果的です。例えばテレビを見るなど好きなことをしているときに、必ず勉強道具を近くに置きます。「テレビwith教科書」です。「CMの間に教科書を3回音読する」というルールを決めてやってみます。テレビは惰性で見ていることも多いため、細切れの音読の方に気持ちがいくようになり、主(テレビ)と副(音読)が逆転します。

1

プラスマイナスで考える

できなかったことを「可能性のマイナス」と捉え、それを「可能性のプラス」に転じさせてあげることです。例えばテストで子どもが20点だったら「80点伸ばせる可能性があるね!」と本気で伝えます。実際私は生徒たちにテストを返すときにそう言っています。ただし、伸ばす努力をするかの選択は本人の責任です。依存型の学習者の場合、できなかった80点を先生や塾のせいにしてしまいますが、自律的学習者は伸ばすためにはどうしたらいいか考えるようになります。

5

安全の欲求を満たす

モチベーションを築く第2段階が安全の欲求で、ここでの「安全」とは、生活するうえでの安心感、経済的な安定性、良好な健康状態の維持のこと。ほとんどが保護者の役割です。学びのうえでの安全とは、「失敗しても間違えてもいい」「やり直しがきく」と子どもたちに感じさせることです。学校でも間違いを恐れると生徒たちは発言やチャレンジをしなくなります。保護者も失敗したらやり直す姿を見せて、子どもが間違いを楽しめるようにしてあげてください。

4

生理的欲求を満たす

子どもの学びへのモチベーションを築くことに家庭の役割は多々あります。心理学者のマズローの「自己実現理論(欲求5段階)」の各段階にそのヒントがあります。その第1段階が「生理的欲求」を満たすことで、生命を維持するための本能的な欲求です。基本は衣食住を満たすことで、なかでも食事は大切です。最近は保護者も高校生も多忙で個食が問題となっていますが、せめて週に何日かは家族で食卓を囲み、会話しながら食事をする時間が欲しいものです。

3

スマホwith勉強

子どものスマホ依存も気になるところです。しかしスマホには良い機能もたくさんあり、おすすめなのは学習動画です。子どもが勉強でよくわからなかったことを「○○ 動画」と検索すると、さまざまな解説動画が出てきます。なかには全編アニメでわかりやすく解説されているものもあり、勉強が苦手な子どもでも理解しやすくなっています。また、世界の大学の講義も日本語の字幕付きで見ることができて、保護者が見ても教養になるものも多いです。

8

自己実現の欲求を満たす

第5段階の自己実現の欲求とは、「なりたい自分になる」欲求です。大企業でも経営難に陥る現在は、一つのことにとらわれず、マルチタスクをこなす働きが求められています。子どもたちの進路も絞る必要はなく、複数の選択肢があった方が一つがダメだったときに次に進みやすくなります。そのためには子どものやりたいことを我慢させないことです。選択した責任は本人にあります。保護者から一つに絞らせるように仕向けられないことも大事です。

7

承認の欲求を満たす

第4段階の承認の欲求とは、自分が集団で価値のある存在と感ずることですが、この中には二つのレベルがあります。低いレベルの承認欲求は他者から尊敬されたい気持ちで、高いレベルは自己尊重です。例えばテストで100点をとって「すごいね」と言われて喜ぶのは前者で、「自分の学び方が正しかったんだ」と自己信頼感が高まるのが後者です。学校や家庭で、結果より過程に目を向け、行動を認めてあげることで満たされる欲求です。

6

愛と所属の欲求を満たす

第3段階は愛と所属の欲求で、ベースは「家庭に必要とされている」という保護者との関係です。この欲求を満たすために、家庭で一人前の大人として扱い、家事を分担させたり、お互いに感謝しあうことが必要です。子どもに選択させるのもその一つです。また、家庭や学校の仲間、親戚など、自分にはさまざまなステークホルダーがいることに気づかせてあげることも大切です。自分一人ではないと感じることが自信をもって前に進む原動力となるからです。

一人前の大人として扱い
可能性を信じてあげる

私は生徒や自分の子どもを大人として扱います。子ども扱いして命令や指示をしたり、頭ごなしに否定すると子どもたちは心を閉ざします。教員と生徒、保護者と子どもも対等なパートナーシップであるべきだと考えています。先が見えない今の時代は、すべての世代が協働して取り組まなければ解決できないことであふれており、若い世代から学ぶことも無数にあります。一方で、保護者は子どもにはない経験をもっています。その経験や自身の仕事の話を子どもに語ってあげればいいと思います。ただし、自分の失敗から「後悔しないようにおまえは勉強しろ」というのはよくありません。後悔しているなら今やればいいのです。失敗してもやり直せる姿を見せる方が効果的です。親が楽しんで何かを学ぶ姿は、子どもたちの学びの意欲を駆り立てることにつながります。

子どもに「幸せの創造者」にならしてほしいのは保護者や教員共通の願いです。子どもがいつも笑顔で幸せに過ごすには、できないことや失敗はその子の可能性であることを本気で信じてあげるのが大人の役割だと思っています。

これからを生きる子どもたちに、「何があっても大丈夫な力」を

一連の教育改革において、特にこの数年は大きな変革期・過渡期に当たります。高校生のお子さんをおもちの方は、不安や不満を感じていらっしゃるかもしれません。そこで今回は、公立高校で長年教鞭を執り、現在は私立中高一貫校の校長を務める真下峯子先生に、保護者ができる支援について伺いました。

「知識を教わる・覚える」から
「自ら知識を取りに行く」学びへ

保護者の方にはまずお伝えしたいのが、「間に合ってよかったですね」ということです。このたびの教育改革には、変化が激しく予測が困難な時代を生きるであろう今の子どもたちに、生きる力（私はこれを「何があっても大丈夫な力」と呼んでいます）を身につけさせる、という目的があります。逆に言えば、これまでの教育には足りていなかった部分があるということであり、わが子がこれからの時代に合った新しい価値基準に基づいた教育を受けられるというのは、とても幸運なことなのです。

今回の教育改革にはいくつか目玉がありますが、肝になっているのが、「知識を教わる」「教わった知識を覚える」から「自ら知識を取

りに行く」、「テーマを深掘りしていく」への学び方の転換です。予測ができない時代に多様性に富んだ社会で生きていくためには、こうした広がりのある学びが不可欠です。誰かが答えや指示を与えてくれるのを待っているようではないのです。

「教える」から「引き出す」へ
教育現場も大きく変わる

教育改革の方針を受けて、私たち教員は、生徒の「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力・人間性」を総合的に育てるためにはどういった授業をすればいいのか、教員の役割は何か…と模索し続けてきました。かつては、教員の多くが指導計画通りに規定の範囲を規定の進度で教えることに注力しており、その結果生徒がどう変わったか、生徒に

学校教育の変化に寄り添い、 子どもの可能性を信じて伸ばす

どういう力がついたのかという成果の部分についてはしっかりと議論がなされていませんでした。しかし昨今は、「生徒にどのような力をつけさせたいのか、ついたのか」という部分についての議論が活発になり、教員間で生徒の状況の共有が

進んでいます。さらに、個人面談やポートフォリオなどのツールを活用して生徒一人ひとりの学びや成長を振り返りながら支えようという取り組みも活発になり、教育現場は大きく変わってきました。その変化を肌で感じています。

大妻嵐山中学校・高等学校校長
真下峯子先生

1952年埼玉生まれ。奈良女子大学理学部生物学科卒業後、埼玉県内の公立中学校・県立高校で理科・生物教育に従事。その間、上越教育大学大学院学校教育研究科で学び、修了（教育学修士）。埼玉県教育局県立学校部勤務、埼玉県立総合教育センター主席指導主事、県立高校長を経て、2014年より現職。自称「ずっと生物学が好きで好きでたまらない理科の先生」。モットーは「学ばない人からは、人は学ばない」。



昨今は、程度の差はありますが、いわゆる「アクティブ・ラーニング」が高校教育にも浸透し、授業

の組み立ても従来とは大きく変わってきています。アクティブ・ラーニングとは「生徒の主体的・対話的で深い学び」のことであり手法を指すわけではありませんが、実際に授業の中にディスカッションやプレゼンテーションを組み込むことで、生徒の主体的な学び合いが進んでいます。かつて一般的だった、教員が生徒に知識やノウハウ(知識の使い方)を教える、という一方的な授業ではなく、教員はファシリテーター的な役割に徹します。どんな導入なら生徒の興味・関心を引くか、どんなテーマについてディスカッションやプレゼンテーションをさせるか、これらの手法をいかに効果的なシーンで使うか、どのタイミングでどの生徒に問いを投げかけるか、関連する知識をどう補っていくか…こうしたさまざまな要素を考慮しながら、「生徒の主体的・対話的で深い学び」を組み立てているのです。

脱・偏差値主義。 高校の学びの目的は…?

一方、保護者のなかには、高校での学びの目的を「偏差値の高い大学に入ること」と据えている方も少なくありません。もちろん、希望する大学への進学は人生における自己実現の一つですので、高校の学びはそのための手段とも言えます。しかし、難関大学合格だけを目的にした学びでは、「予備校難な時代に何があっても大丈夫な力」を身につけるといふ点において、あまりに視野が狭すぎます。これからの世の中の変化や子どもたちの将来を考えたときに、偏差値や教科学力の向上だけを重視した勉強で本当に大丈夫なのか、考えていただきたいのです。テストの点数や成績だけで、子どもの能力や成長を判断してはいないでしょうか。関心事を深く探究する力、自ら考える力、人と協力しながら物事を進める力、学んだことを使って何かをしたいという課題解決意識…そういった力や意識が育つて

いるかどうかという視点を、ぜひもっていただきたいと思います。

大切なのは、学校と保護者が 同じ方向を見て歩んでいくこと

価値観が多様化する今の時代は、子どもの教育について、学校と保護者とが同じ方向を見て歩んでいくことが大切です。わが子が通っている学校では、どのような力を育てるためにどのような教育が行われているのか、背景にある意図や目的も含めて理解し、学校と同じ視点をもっていたいただきたいと思います。

例えば私が校長を務める大妻嵐山中学校・高等学校では、従来は非公開だった授業研究会を「授業づくり公開授業研究会」とし、保護者や一般の方にも公開するようになりました。保護者からは「先生方がここまで努力し、試行錯誤されているとは知らなかった」という声を多数頂き、学校教育を閉じたものにせず、保護者に向けて発信し共有することの重要性を改めて感じました。

とはいえ現状としては、大学受験指導に偏った教育を行う学校は少なくありません。しかし、学びの場は学校だけではなく、学校、塾・予備校、自宅に加えて、地域での活動など第4の学びの場

があれば、そこから世界は大きく広がります。親としてできるのは、出会いの場を作ること。わが子が学びのなかでおもしろい、すごい、楽しい、好きだと感じている探究心の芽を伸ばせる場をつくることです。受験指導一辺倒の方針に疑問を感じられたのであれば、それはむしろチャンスなのです。

子どもたちは、可能性もバイタリティも大人が思う以上にたくさんもっています。大人はつい自分の経験から勉強や進路選びに口出しをしたくなるのですが、子どもを信じ、学校と家庭とが一体となってバックアップし、その芽を伸ばしていきましょう。

子どもの“おもしろい”“好きだ”を 伸ばせる場をつくってあげてほしい

